

平成 21 年 8 月 24 日

超臨界流体部会臨時幹事会議事録(案)

日時:平成 21 年 8 月 4 日(火)17:20~18:50

場所:熱海ニューフジヤホテル(熱海)

出席者(敬称略):船造俊孝(中央大学)、後藤元信(熊本大学)、中川尚治(パナソニック電工)、鈴木 明(産総研)、古屋 武(産総研)、大島義人(東京大学)、岩井芳夫(九州大学)、川崎慎一郎(産総研)、陶 究(産総研)、吉田絵里(豊橋技術科学大学)、川尻 聡(竹中工務店)、後藤 敏晴(日立電線)、佐古 猛(静岡大学)、山田和矢(東芝)、由井和子(中央大学)

議題:

1. 超臨界流体クロマトグラフィー研究会との共催 or 協賛について

船造部会長より、阪大の馬場先生、日本分光㈱の堀川氏らが中心になって超臨界流体クロマトグラフィー研究会を立ち上げ、今年の 11 月末にシンポジウム開催予定、との説明があった。今後セミナー等について前向きに共催または協賛依頼を受けることが承認された。

2. サマースクールについて

・謝金

船造部会長より、サマースクールで産総研の先生に講師をお願いした場合、「原稿執筆料」として御礼をお渡ししたい(今年度分から)、との説明があり、承認された。

・目的、対象

船造部会長より、サマースクールを行う目的と、聴講の対象を誰にするか(現状のままか、学生も対象にするか)等を明確にしたらどうか、との提案があった。

・その他

サマースクールについて化学工学会から会告を出してもらうためには、5 月末までには宿泊先・スケジュール等、全て決まっているのが望ましい。そこから逆算すると、4 月ごろには原案(開催地、プログラム、講師の方の案)が決まっており、春の年会で、テーマと開催地(東京か仙台か等)を確定したい。そのため次の秋季大会の幹事会では、幹事(材料 WG の方の予定)を決定したい、との説明があった。

3. 国際会議への共催要綱

船造部会長より、国際会議の共催等において、部会の積立金を他機関に貸借するための規則がないので不都合が生じている。資金の貸借ができるように改訂を準備したいとの説明

があった。※積立金について、「超臨界流体部会行事積立金取扱規則」という規則があるが、ここには「資金の貸借」に関する条項はないので改訂する、とのこと。

5. 超臨界流体部会活動成果集(ワーキンググループ活動報告書 No. 6)について

船造部会長より、執筆者のみではなく取りまとめ役の先生にも謝金を支払うとの説明があり、承認された。

5. 積立金からの支払い承認願い

以下の件について船造部会長から説明があり、承認された。

- ・委託調査費払い

船造部会長より、昨年度の委託調査費※が、今年度に支払われた件について説明があり、承認された。

(※平成20年度地域イノベーション創出研究開発事業「亜臨界水中燃焼法によるバイオマス廃棄物処理・熱利用技術の開発」に関する調査依頼
「亜臨界～超臨界水利用プロセスの稼動状況、経済評価、環境影響などについての調査」と題した調査結果を平成21年2月12日に静岡大学工学部に納品。

委託調査費支払 ￥630,000- (3月23日支払)

受託調査費収入 ￥997,080- (3月25日入金)

*静岡大からの受託調査費の入金が末日になる可能性があるとの連絡が有り、委託調査外注費の支払期限が迫っていたため受託調査入金を待たずに支払いをしたかたちとなった。)

- ・サマースクール費用

別紙が配布された。

- ・活動成果集 原稿料謝金、印刷代

説明があった。

- ・秋季大会 展望講演者謝金 参加登録費：8,000+ 謝金@11,111×3名

参加費(3名分)のうち、2名分は化学工学会負担、1名は部会負担との説明があった。

6. 秋季大会学生賞 選考基準と運用方法の確認および審議

古屋幹事より、学生賞の選考基準に関して、以下の提議がなされた。

・学生の研究内容は、指導教官によるところが大きいので、研究内容もふくめて学生個人の能力の評価をするのは難しい。そこで審査の基準として、①学生個人のプレゼン、質疑応答、発表態度を問い、研究の質は問わない、②研究内容も含めて評価する。この場合は研究グループ全体を評価する。の2通りが考えられるが、どちらにすべきか？

それに対して以下の意見が得られた。

- ・発表のテクニックだけ評価するのはよくない。研究内容も評価するべき。

・研究内容は、研究室でずっと継続されてきた課題か、新規なものか等によっても達成度やよし悪しがあるだろうが、設定された目的に対してどこまで自分のものとして理解し、努力しているか(熱意、理解度、達成度)は評価できるし、そこを評価するべき

- ・発表の質疑応答における対応のしかたで、熱意や理解度が分かる

いずれにしても、研究に対する意欲・達成度は評価すべき、との意見であった。また、以下の意見もあった。

- ・「研究に対する熱意」を評価するのであれば、評価項目に重み付けをしておいてはどうか？（質疑応答の配点を重くする、等）特に発表後に、審査結果を話し合う時間はほとんどないのだから、重み付け等も含めて、あらかじめ決めておく必要がある。
- ・不特定多数が審査するのではなく、審査委員を決めるべきである

⇒古屋幹事から、得られた意見を踏まえて、審査案（重みのつけ方など具体的な部分も）を委員会にでもっと詰めてから、またご連絡する、との説明があった。

7. 秋季大会「安全についての講演・討論」セッション

大島幹事より、秋季大会「安全についての講演・討論」セッションでの進行予定について説明があり、皆様の活発な御議論、問題提起をお待ちする、とのことであった。

8. 講演会企画(成果報告集を使って)

・船造部会長より、部会を今後とも活性化していくためには、新規部会員を増やす必要がある。そのために、成果報告集を使って、仙台、大阪、東京等の全国いろいろな地域にて、講演会を開催するのはどうか？との提案があった。

・（講演会を行うとした場合）化学工学会支部と共催にすると、事務手続きが減って良い。この場合は講演会が赤字でも黒字でも支部と折半になるとの説明があった。

最初の提案に対し、以下の質疑と意見が得られた。

- ・聴衆の対象は？→学生でも、企業でも、部会員以外でもよい
- ・三カ所同時開催か？→同時でもよい
- ・関西の部会員は少ないため、超臨界流体部会だけで、関西方面で、他地域と同時に講演会を開催するのは難しい。しかし関西の産総研や、バイオマス学会（松村先生、坂先生）、繊維学会の超臨界流体部会と共催・協賛すればできるかもしれない。

9. その他

船造部会長より、次期（8年後）の部会継続申請書の作成のため、部会に係わる資料をできるだけ残す必要がある。そのため国際会議等、部会と協賛・共催する行事を行う際は、事務局に国際会議に関する資料一式を送ってほしいとの説明とお願いがあり、国際会議の協賛・共催願に「会議に関する資料一式」を一緒に提出することを義務付けたらどうか、等の提案があり、協賛・共催願にその旨の文言を追加することに決まった。

以上